

いよび木

No. 79

特集

Special Section

大学のグローバル化

牽引する岡山大学グローバル！

パートナーズが描くビジョン！

- 岡山大学から世界へ、グローバルに活躍する卒業生
田中 徹さん SBI ファーマ株式会社
取締役 執行役員 CTO
- 研究室訪問 佐藤 和広 資源植物科学研究所
大麦・野生植物資源研究センター
- きらり岡大生 福栴 純平 大学院環境生命科学研究所2年
- News & Topics 大学の動き／研究・臨床成果
- 津島祭！鹿田祭！収穫祭！／英語ホームページリニューアル



グローバル・パートナーズのウッドデッキ

—どのように留学生受け入れを拡大していくのか。

グローバル・パートナーズ自身の課題としては、2014年10月に導入した「大学院予備教育特別コース（通称・プレマスター）」、「短期留学受入プログラム（通称・3+1）」が要になると考えている。双方合わせた留学生数は導入当初の倍の62人に増え、2015年10月からは指導教員を増やしたところだ。

また、現在のマッチングプログラムコースを発展させ、先進的な取り組みとして、日本人学生30人と世界各国から集まった留学生30人が一緒に学び、英語のみで学位取得できる「グローバル・ディスカバリープログラム」の2017年度開設を目指している。総合大学の利点を生かした、世界の重要な課題を担えるグローバル人材を育成したい。

さらに、医工連携大学院構想の実現によって受け入れる計画もあり、また、文部科学省委託事業として昨年度から取り組んでいる「ミヤンマー留学コーディネーター配置事業」はミヤンマーの学生を受け入れる大きな仕組みになっている。今後は、学部・大学院の留学生受け入れの支援を強化したいと考えている。



Director of Center for Global Partnerships and Education
YAMAMOTO, Yoko

英語力や即戦力も求められる。現地企業との信頼関係の構築も重要課題になるだろう。カナダの「Co-opプログラム」は、大学と企業が連携して、学生を長期（3カ月から半年）にわたって有償で就業体験させる制度であり、北米の大学を中心に大きな広がりを見せている。岡山大学では今年度、この「Co-opプログラム」の試行的実施として「森林利用グローバルインターンシップ」を開講。プリティッシュ・コロンビア大学の学生を受け入れ、岡山県内の木材関連企業や研究機関に3カ月、岡山大学の学生は3週間単位で日・加学生を組み合わせ実施した。やがては岡山大学の学生をプリティッシュ・コロンビア大学に派遣することも視野に入れている。

資金面では文部科学省が2014年度から始めた官民協働の奨学金制度「トビテ！留学JAPAN」に積極的に申請し、採択者数を増やしたい。

—学内の多様な留学交流プログラムに

特集
Special Section

大学のグローバル化

～牽引する岡山大学グローバル・パートナーズが描くビジョン～

岡山大学が文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業の支援対象機関に採択されて1年が経過した。国際センターを改組して設置したグローバル・パートナーズを中心に、柱となる留学生の受け入れ・派遣数拡大に向けた取り組みが加速している。荒木勝理事（社会貢献・国際担当）、グローバル・パートナーズの山本洋子センター長、穴沢一夫副センター長に国際化の戦略や今後の展望を聞いた。



も期待がかかるが。

既存の海外交流プロジェクトとして、国際交流協定を締結した海外の大学と実施している「岡山大学短期留学プログラム（EPOK）」や、岡山大学と有力な中国東北部の大学の大学院間で短期留学やダブルディグリーを取得することができ、「岡山大学・中国東北部大学院留学生交流プログラム（ONECUS）」などがある。各部署においては、医学部の「医学研究インターンシップ（MRI）」、歯学部では3年生が海外の大学で聴講生として参加できる短期留学制度「ODAPUSプログラム」や、環境生命科学研究所ではベトナム・フエ大学との「岡山大学・フエ大学院特別コース」の学生の転入学制度があるが、大学としてさらなる協定の拡大に努めるとともに、各部署においても国際交流協定に基づく交換留学プログラムを充実させ、留学生の受け入れ・派遣数拡大に積極的に取り組んでもらいたいと思っている。

—学生の受け入れ・派遣状況を正確に把握することも重要だが。

学務システムで登録できるようになっているが、短期留学生の未登録情報があるなど、これまで実態把握が不十分だった。今後は新たなプログラムの導入も増えてくるわけで、短期留学生の受け入れ・派遣数などを正確に把握

できる体制にしたいと考えている。各部署がそれぞれ目標を掲げ達成できるように柔軟な登録制度を速やかに構築したい。さらには、グローバル・パートナーズと各部署が、互いの現状やニーズを把握し全部局で留学生の受け入れ・派遣を促進する協力体制の強化が必要だと考えている。

—国際ネットワークの拡大やインフラ整備については。

留学生誘致の大きなベースになっているのが海外同窓生のネットワークだ。国際同窓会は現在45支部あり、2016年度までに50支部が発足予定で、海外事務所とともに拡大し、包括的連携協定を結ぶ国立六大学（岡山、千葉、新潟、金沢、長崎、熊本）の共同事務所の設置も進めながら海外拠点の拡充に力を入れたい。

一方で留学生数の増加に伴い宿舎の確保も必要である。留学生と日本人学生が共同で暮らす国際学生シェアハウ

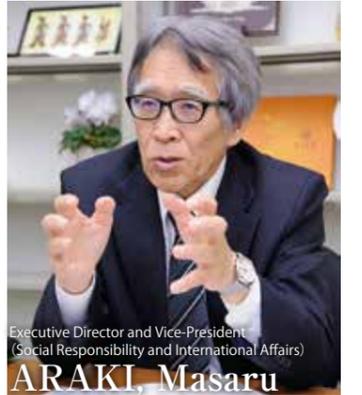


Vice-Director of Center for Global Partnerships and Education
ANAZAWA, Kazuo

—日本人学生の派遣数拡大に向けた取り組みは。

柱となるのは、学生の一部を選抜し、入学した学部にも所属しながら独自カリキュラムで英語力などを強化する「グローバル人材育成特別コース」の拡充。ここでは語学研修や2カ月から1年間にわたる長期の海外留学が必修で、2015年度は定員を100人に倍増した。

2016年度から理系学生の海外インターンシップを実施できるよう、早急にプログラムの整備に取りかかっている。理系学生はカリキュラムが非常に立て込んでおり、長期の海外留学が難しい傾向にあるが、「60分授業・4学期（クォーター）制」の導入によって、夏季・春季休業と組み合わせればインターンシップがしやすくなる。ただ、欧米のインターンシップは日本の考え方と異なるところもあり、欧米では企業の求めるインターンシップ像がかなり専門的で



Executive Director and Vice-President (Social Responsibility and International Affairs)
ARAKI, Masaru

—今後の展望は。

外国人留学生の受け入れにおいて、2015年11月1日時点の留学ビザを持つ在籍者数は628人であり、SGU数値目標にある年間延べ人数では、11月現在で750人を超えている。日本人学生の派遣は337人（昨年度）だが、「スーパーグローバル大学創成支援」事業の最終年度となる2023年度にはそれぞれ3倍程度増やすことを目標としている。岡山大学の進む方向性は、教養力、語学力、専門力の3基幹力を修得し、実践知を身につけた、世界で活躍できる国際力豊かな「実践人」の育成である。ただ数だけを追求するのではなく、岡山大学の独自色をいかに出せるかといった視点が重要である。大学教育を根本的に見直し、世界から信頼され、留学生が私費でも来たいと思える優れた教育プログラムや研究システムがある大学を目指していかなければならない。

国際化に向けた 主な取り組み

03 短期留学受入プログラム、大学院予備教育特別コース

留学生数の増加へ 日本語・日本文化を学ぶ教育プログラム

グローバル・パートナーズは2014年10月から、対象者の異なる2種類の日本語・日本文化を学ぶ教育プログラムとして「短期留学受入プログラム（通称：3+1）」と「大学院予備教育特別コース（通称：プレマスター）」を開設している。

3+1プログラムは、協定校において日本語・日本研究を専攻する学部学生を対象に日本語の修得や、日本文化に関する理解を深めてもらうことを目的とした半年間のプログラム。これまで自国で学んできた日本語をより実践的に磨くための地域演習等の科目や、日本人学生も履修する教養教育科目などで構成し、さまざまなメニューを通じて日本文化や地域に対する幅広い知識と教養を身につけることが目的だ。

プレマスターコースは、大学を卒業し大学院進学を目指す留学生を対象に予備教育を行う。留学生は研究生として在籍し、大学院での研究活動に必要なアカデミック・ジャパニーズを学ぶとともに、学術研究に関する理解を深めることを目的としている。主に社会文化科学研究科や教育学研究科と連携し、指導教員とのマッチングの支援も行っている。



開設当初の2014年10月期は3+1プログラム生11人、プレマスターコース生17人だったが、2015年10月期は3+1プログラム生35人、プレマスターコース生27人（ともに4月期からの継続者を含む）となり着実に受け入れ人数を増やしている。今後は、3+1プログラム修了生がプレマスターコースで学び、大学院生になるという流れの構築を目指し、より魅力的なプログラムを実施していく。

04 キャンパス・アジア人材育成プログラム

東アジア地域の伝統・文化に 精通した中核的リーダーの育成へ



岡山大学は2011年から、中国の吉林大学、韓国の成均館大学校と協力し、東アジア地域の伝統・文化に精通した中核的リーダーを育成する「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」（通称：岡山大学キャンパス・アジア）に取り組んでいる。文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」として採択された同プログラムでは、共通善教育、語学研修、長期留学、サマースクール、共通教科書編纂、ナノバイオコース等の豊富なプログラムを東アジア型グローバル教養教育システムとして確立。また、学生フォーラム、リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、中韓留学ワークショップ等、地域のコミュニティに出かけて実施するアクティブ・ラーニングをベースとした授業を数多く開講し、東アジアに共通の課題を設定して議論を

深め、相互理解を形成。3、4カ国語を使って討論する多言語セミナーなどの授業方式も取り入れている。

これまでに3大学間でダブルディグリーの協定が締結され、国際共同大学院設立の準備も進められているほか、学生の自発的なキャンパス・アジア学生クラブ、同窓会、学生新聞編集委員会等が設立されるなど、今後も持続的な学生交流を行う環境が整備されている。

CAMPUS Asia ロゴマーク

家紋をイメージし、岡山大学（Okayama Univ.）、吉林大学（Jilin Univ.）、成均館大学校（Sungkyunkwan Univ.）のそれぞれの頭文字を組み合わせて制作。家紋は自らの家系などを表すために用いられてきた紋章で、3大学が家族のように互いを理解し、東アジアの共通善の実現のために協力していく姿勢を表現。また、青は知識、進歩、信頼、自信を表す。

01 One Young World

アジア初開催となる「世界ユースサミット One Young World」に初参加

岡山大学は、2014年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択されたPRIME（PRactical Interactive Mode for Education）プログラムに基づき、グローバルな場で通用する「実践知」を涵養する教育を進めている。日本人のアイデンティティを形成し、自分の考えを語るコミュニケーション力、自らの置かれた立場で自ら現場で適切な判断ができる能力を備えたグローバル人材の育成を目指しており、「世界ユースサミット One Young World（OYW）」に初めて参加することを決めた。

2015年のOYWは11月18日から4日間の日程でタイ・バンコク市を会場に開催され、岡山大学は日本の学生代表として医学部6年の原田洸さん、文学部4年の桑田和倫さんを派遣。世界196カ国から約1300人が参加し、人権問題や平和構築、気候変動、サステナビリティ、ヘルスケア、社会イノベーションなど多岐にわたり活発なディスカッションを実施。幅広い分野での産学官連携によるサービスラーニングプログラムも行われた。2人は日本代表団の一員として積極的にディスカッションと活動に取り組み、グローバルリーダーとして、メッセージの重要さやそれを伝えるプレゼンテーション、アクションの大切さを学んだ。



世界ユースサミット One Young World (OYW) とは

OYWは2009年の世界経済フォーラム（通称：ダボス会議）で宣言され、世界が直面する地球規模の課題に対し、世界的指導者達の下、各国を代表する次世代リーダー達が連携して問題を解決するためのサミット。現在、全世界合同産官学連携の次世代リーダー育成プロジェクトとして、その規模とネットワークを急速に拡大し続けている。また、OYW参加者は“OYWアンバサダー”の称号が授けられ、全世界約6000人の有能な若者達と長年にわたる世界人脈を広げることができる。

02 ミャンマー留学コーディネーター配置事業

国立六大学連携で、 日本への留学生数倍増を目指す



岡山大学は20年近く医学系でミャンマーと交流が深く、80人以上の医療人を受け入れており、2014年9月、文部科学省の「ミャンマー留学コーディネーター配置事業」に採択された。また、国立六大学（岡山、千葉、新潟、金沢、長崎、熊本）では工学・医学分野でJICAプロジェクトをミャンマーで行っていることから、これらの実績を原動力とし、国立六大学、国立六大学連携コンソーシアムに加わる大学にミャンマー人

留学生を受け入れ、ミャンマーとの大学交流の発展に寄与すべく、同事業を実施。2015年3月にはミャンマー語に通じた専門家を留学コーディネーターとしてヤンゴンに配置した。

留学コーディネーターはミャンマー政府の人材育成計画を把握し、精力的に現地の高校や大学などの教育機関を回り、情報収集やネットワーク化を推進するとともに、日本への留学コーディネートや準備協力をを行う。岡山大学とMOU（覚書）を締結しているミャンマー元日本留学生会（MAJA）、岡山大学国際同窓会ミャンマー支部とが協力関係にあり、ミャンマー商工会議所連合会の協力による留学生へのインターンシップ事業も推進している。2015年9月にミャンマーで開催した「日本留学フェア」には前年比約300人増の約1000人が参加。岡山大学は国立六大学の広い受け皿を活用した“オールジャパン体制”でミャンマーの留学生受け入れを推進し、日本全体への留学生数（2014年：629人）を2019年には倍増させ、1300人を目指す。



SBIファーマ株式会社 取締役 執行役員 CTO ◆岡山大学理学部化学科卒・大学院理学研究科化学専攻修了

田中 徹

T A N A K A T o h r u

動植物の生体内にあるアミノ酸の一種で、細胞内のエネルギー代謝を促進する力を持つ5-アミノレブリン酸(ALA)。量産技術を確認し、植物の肥料からがん手術まで、さまざまな分野での活用策を見だし、研究成果を世界に届ける。

- ▶たなか とおる (54歳)
- 1961年 愛媛県出身
- 1984年 岡山大学理学部化学科卒
- 1986年 岡山大学大学院理学研究科化学専攻修了
- 1999年 コスモ石油株式会社入社 同社中央研究所研究員
- 2003年 ALA事業開発グループグループ長
- 2008年 ALA事業推進センターセンター長
- 2008年 リサーチフェロー
- 2008年 SBIホールディングス株式会社とコスモ石油株式会社の合併事業によりSBIファーマ株式会社設立
- 2008年 取締役 執行役員 CTO (Chief Technology Officer)



◀オランダの展示会にてスタッフと田中さん(中央)

ALALAは人のあらゆる細胞において、ミトコンドリアで合成

ALALAを手術に活用

ALAは人のあらゆる細胞において、ミトコンドリアで合成され、エネルギー代謝を促進する力を持つ。単剤では除草効果を示すALAは、ミネラルとの組み合わせで葉緑体が増強され、光合成が促進されていたのです。

原因は配合にありました。単剤では除草効果を示すALAは、ミネラルとの組み合わせで葉緑体が増強され、光合成が促進されていたのです。

失敗から生まれた

ALA研究のスタートは、ある一つの失敗がきっかけでした。1990年、ALAを用いた除草剤を開発していたある日のこと、試作品を散布したところ枯れるはずの植物が逆に良く育っていたのです。

アミノ酸に着目した研究生活

動植物の生体内に含まれる天然アミノ酸、5-アミノレブリン酸(ALA)に着目した研究に取り組んでいます。かつては生産が難しく、コストが高いため実験でもあまり使えなかったALAの量産に成功。コストが10分の1ほどに下がったことで、農業や医療などさまざまな分野で用途が広がっていくことは本当にうれしく、研究者冥利に尽きます。

変わるもの変わらないもの

変わるもの変わらないもの

農学、医学など次々と活動の幅が広がってきた時に困ったことは、専門用語が分からないこと。分野が変わる度に苦労したのを覚えています。ただ、変わらないものもあります。それは、原理や原則など、大学時代に学んだ研究の基盤となる部分。自由な雰囲気の研究室で研究漬けだった日々が、今を支えています。

この現象をもとに、がん細胞に光を当てる機器の開発に着手。製品化した機器により、手術中のがん部位特定が容易になり、膀胱がんや脳腫瘍の手術現場で実際に活用されています。

される代謝に必要な不可欠な物質へムは原料でもありません。ヘムは酸素を運ぶヘモグロビンの中心となる大切な成分です。研究を進めると、正常な細胞はALAをヘムに代謝できる一方、がん細胞ではヘムに代謝できないことがわかりました。ALAがポリフィリンに変化したまま、がん細胞に蓄積されていきます。「これは興味深い」と思いました。ポリフィリンは特定の波長の光を当てると赤く蛍光するからです。

世界中に届けたい

毎月のように海外に行っていたころもありましたが、今では世界中からお越しいただくことも多くなりました。ALAという当社のオリジナリティがあるからこそですが、誠意をもって対応することで、活用場が広がってきたのではと思っています。

さまざまな可能性を秘めたALAの研究を進め、その成果をこれからも世界中に届けていきたいです。

一人ですタートした研究も、今では国際学会が立ち上がり、世界中に研究者がいます。アラブ首長国連邦のUAE大学と共同で行った砂漠の緑化、英国オックスフォード大学との心臓バイパス手術への応用など、新しいプロジェクトがどんどん立ち上がっています。

ALAを用いた製品の開発、製造を行うSBIホールディングスとコスモ石油のジョイントベンチャー、医薬品分野、化粧品、健康食品において、ALAを利用した製品を提供すべく事業展開を行っている。



▶特殊な光を当てると赤く光るがん細胞
= 柏葉脳神経外科病院 金子貞男理事長提供

SBIファーマ株式会社

所在地: 東京都港区六本木
事業内容: 医薬品、医療機器、化粧品および健康食品の開発、製造

ALAを用いた製品の開発、製造を行うSBIホールディングスとコスモ石油のジョイントベンチャー、医薬品分野、化粧品、健康食品において、ALAを利用した製品を提供すべく事業展開を行っている。

可能性秘めたアミノ酸ALA
活用策を世界に届ける



「高度な知の創成と的確な知の継承」—。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。



◀資源植物科学研究所

復興にエールを

「オオムギの遺伝資源を利用して、復興に役立ちたい」。東日本大震災の被災農地の復興支援プロジェクトに携わる佐藤教授の思いは強い。津波で塩害を受けた農地でも育つ新品種の実用化に向けた研究を進めている。

オオムギは他の穀物より塩害に強い特徴を持つ。佐藤教授は、保有する約1万5千種類の種子の中から、特に塩害に強い特性を持つ品種を選別。国産の優良品種と交配させて、津波で被災した農地でも栽培できるビール用オオムギを開発している。現在は、ビール用オオムギがほとんど栽培されていなかった宮城県で栽培特性を調査している。「ただ育つだけでなく、おいしいビールができることが重要」と話す。開発した品種を使い、地元的地ビール会社の協力を得てビールを醸造。フルーティな香りと苦みのバランスがとれた味わいに仕上がった。地元のレストランで提供し、人気も上々という。商品名は「復興エール」。被災地にエールを送りたいという気持ちを含んでいる。

蓄積された遺伝資源を用いて、人の役に立つ品種改良を目指す

岡山大学資源植物科学研究所は大正3（1914）年、大原孫三郎によって農業技術の向上を目的に設立された。現在は、文部科学省の共同利用・共同研究拠点として認定。国内外の研究者と連携し、さまざまな環境下で生育可能な作物を創出するための研究を進めている。



オオムギとの出会い

機械いじりが好きだった少年時代。ステレオアンプを工作するなど、実践に取り組み、多くの本も読んだ。いろいろなことが知りたい、もっと難しいことに挑戦したい。大学に進学したのもそんな思いからだ。

農学分野を選んだ理由は「食べ物という全ての人に關わる分野で、大勢に役立つ研究をしたかったから」と振り返る。大学時代から変わらぬポリシーは、現在でも研究の根拠を支える原動力となっている。

オオムギ研究のきっかけは、北海道立農業試験場で研究員として、ビール醸造用の品種改良を担当したこと。当時、オオムギの研究員は、コムギに比べて少なく、農業試験場内ではたった一人。栽培から、データ管理、品種登録などすべてを一人で担当しながら、オオムギ研究のいろはを学びつつ、現在も北海道で栽培されているオオムギの品種「りょうふう」の開発にも成功した。

オオムギの研究

若手研究者へのアドバイスとして「自分と同年齢の優秀な科学者と積極的に交流してほしい」と話す佐藤教授。自身は1995〜96年、オオムギ研

究のためデンマークやアメリカの研究施設に留学。その頃知り合った研究者とは、共同研究などの協力関係はもちろん、今でも家族ぐるみでの交流が続く。同年代の研究者の存在は、大きな刺激となり、研究を進める大きな支えになっているという。

2006年〜現在、日本を含む6カ国で構成する国際的なオオムギの全ゲノム配列決定コンソーシアムに参加。2012年にはさまざまなオオムギの形質を決定する遺伝子2万6159個を同定した。現在の新品種の開発には、このとき解析したゲノム情報を利用している。

夢は、品種改良により塩害に強い品種をはじめ、高温や低温、乾燥などさまざまな環境下に適したオオムギの開発だ。これに向け、まずは遺伝子配列の解析に要する時間の短縮に取り組み。研究室にある手のひらサイズの解析器「DNAシーケンサー」は、現在1カ月かかる解析時間をたった1日に短縮。2016年にはこの機器48個を組み合わせた装置を導入する予定で、順調にいけば、比べものにならないほどのスピードアップにつながる。

「オオムギを自在に設計し、復興支援はもちろん食糧難に苦しむ世界の人々の役に立ちたい」。視線ははるか先を見据えている。

SATO Kazuhiro (57歳)
 ▶1958年 北海道北見市生まれ
 ▶1981年 北海道大学農学部農学科 卒業
 ▶1981年 北海道立農業試験場研究員
 ▶1989年 岡山大学資源植物科学研究所助手
 ▶1994年 岡山大学資源植物科学研究所助教授
 ▶2009年 岡山大学資源植物科学研究所教授
 ▶2010年 岡山大学資源植物科学研究所附属大麥・野生植物資源研究センター長

資源植物科学研究所
 附属大麥・野生植物資源研究センター 教授・センター長

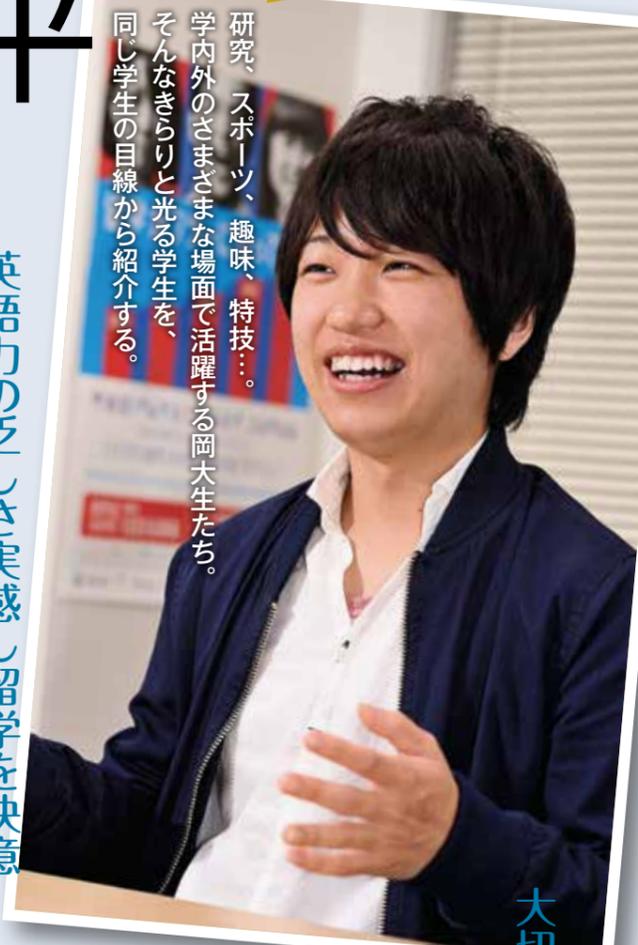
佐藤 和広

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

福柵 純平

大学院環境生命科学科2年
FUKUMASU JUMPEI



研究、スポーツ、趣味、特技……。学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなキラリと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。

英語力の乏しさ実感し留学を決意 文科省の支援制度を利用しイギリスへ

文部科学省が企業と一体となって留学を志す学生を支援する「トビタテ！留学JAPAN」日本代表プログラム。福柵純平さん（大学院環境生命科学科2年）は、その第一期生に選出され、2014年9月から1年間、イギリスのレディング大学に留学した。

「留学を志すようになったのは学部生のころ。海外で働くことに興味があった福柵さんは大2のときに一人旅でマレーシアに、3年の夏にはオーストラリアでの語学研修に参加した。「外国へ行くことの楽しさを感じる一方、自らの英語力の乏しさに気づ

大切なのは自分の意見を主張する積極性

留学生活は今まで受けたことのない土壌汚染学や微生物学がとて新鮮で、実験やフィールドワークなど、理論のアウトプットの機会も多数あった。多種多様な専門分野の人々との交流も楽しかった。ただ、遊ぶ余裕などほとんどない毎日。授業後は図書館にこもって本や論文を読み、課題に取り組んだ。休日も勉強漬けだった。「プレゼンテーションなどで発言できなかったら不参加とみなされる。コミュニケーションにおいても留学生だからといって全く容赦されなかった」。

「それでも友人たちの努力する姿を見てみるとモチベーションは自ずと上がった」と福柵さんは振り返る。新たな知識や研究の手順、情報の仕入れ方など、今まで知らなかったことを知る喜び、自分の意見を自分の言葉で主張することの大切さを実感することができた。恩師の知り合いでもあった日本人の先生はいつも相談に乗ってくれ、現地の指導教官とは互いにファーストネームで呼び合い、ディスカッションを楽しんだ。「研究者の方々と知り合い信頼関係を築くことで、より充実した留学になった」と感じている。留学を機に研究者の道に進むことも考えるようになった。目下

トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム

文部科学省が2013年10月に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度。2020年までに約1万人の大学生・高校生を海外に送り出す計画で、支援企業・団体の寄付により奨学金（返還不要）を提供するなどし、世界で活躍できる人材を育成する。岡山大学からはこれまでに11人が採択されている。



インタビュー
岡山大学学生取材班
文学部人文学科1年
稲毛 由加子

の目標はイギリスでの研究を論文にまとめ、新しい課題を探り、研究を重ねていくこと。「何事も誠意をもって取り組み、自分ができる最大の努力をすれば、周りの人々は必ず力になってくれる。最後まで諦めなかった人に勝ちが巡ってくる」。福柵さんは同じように留学を志す学生に熱きエールを送る。

9 September

7日 岡山市が運営する貸し出し自転車「ももちゃん」の専用置き場（ポート）が津島キャンパスに設置されサービスを開始

10日 教育開発センターが、大学教職員等を対象にした研修会「桃太郎フォーラムXIII」を開催

17日 定例記者発表（9月）を開催

18日 「岡山大学・フエ大学院特別コース」第9期生入学式を挙行政

25日 岡山大学Alumni（全学同窓会）が、広島支部を設立

30日 平成27年度秋季学位記授与式を挙行政



10 October

1日 大学院教育学研究科に寄付講座「国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座」を公益財団法人福武教育文化振興財団、公益財団法人福武財団からの寄付により開設

1日 岡山大学上海事務所を開設

5日 研究推進産学官連携機構が、研究者が最新の科学を分かりやすく説明する「第51回岡大サイエンスカフェ」を開催

10

5日 グローバルパートナーズの短期留学受入プログラムと大学院予備教育特別コースの第3期生開講式を開催

8日 平成27年度岡山大学秋季入学式、大学院秋季入学式を挙行政

8日 10日 ケニアのジョモケニアツタ農工大学ロセンゲ・トゥループ農学部副学部長らが、森田学長を表敬訪問

14日 16日 アジア最大のバイオビジネスイベント「Bio Japan 2015」に出席

15日 環境管理センターが環境マネジメントについて学ぶ「第16回サステイナブル・セミナー」を開催

17日 同窓生や地域の人を招き、在学生や教職員、大学に親しんでもらうイベント「ホームカミングデー2015」を開催

17日 中華人民共和国の東北大学で「第2回中国東北三省日本語スピーチコンテスト」を開催

18日 グローバル化・国際交流の推進を目的に「岡山大学スーパーグローバル大学2015」を開催

21日 若者と政治シンポジウム「18歳からの選挙参加で明日の日本を創る」を開催

23日 定例記者発表（10月）を開催



10

28日 卒業生で元オリンピック選手の小林祐梨子さんを招き、「岡山大学アカデミック特別講演」を開催

30日 岡山大学Alumni東京支部が「第16回卒業生ラオロアップセミナー」@東京を開催

6日 8日 津島地区で津島祭、鹿田地区で鹿田祭を開催

9日 留学生が母国語で岡山での生活や研究内容などを紹介するインターネットラジオ番組を開始

10日 岡山大学Junko Fukurake Hallの「第56回BCS賞」受賞・開設2周年記念シンポジウムを開催

12日 中華人民共和国の東北師範大学中国赴日国留學生予備学校赴日予備校の秦兆明副校長が来学

19日 定例記者発表（11月）を開催

21日 22日 農学部収穫祭を開催

29日 平成27年度岡山大学解剖体慰霊祭を挙行政



研究・臨床成果

■大学院自然科学研究科の塚田啓二教授らの研究グループは磁気計測により鉄鋼製のインフラ構造物の目に見えない内部や裏面の腐食により厚みが薄くなった状態を非接触で迅速に検査できる装置の開発に成功した。[CEATEC JAPAN 2015]で展示・発表。（10月・臨時発表）

■大学院自然科学研究所の二見淳一郎准教授と東京大学、川崎医療福祉大学、株式会社メティネットらの共同研究グループは、がん患者の体内で誘導されるがん細胞に対する免疫応答のレベルを、ごく微量の血液から定量評価する新技術を開発した。[Bioconjugate Chemistry] 電子版に掲載。（10月・定例発表）

■資源植物科学研究所の馬建鋒教授と高知大学らの共同研究グループは、イネの生育に欠かせないマンガンの吸収に必要な排出型輸送体タンパク質OSMTIPを世界で初めて突き止めた。[Nature Plants]に掲載。（11月・臨時発表）

■大学院医歯薬学総合研究科の和田淳教授らの研究グループは、肥満ラットの臓器脂肪組織に増加するタンパク質「Gpnmb」(glycoprotein non-melanoma protein B)を発見。Gpnmbが脂肪肝や肝の線維化を抑制すること、Gpnmbがコルチコステロイド（MSH）が進行した患者で血清Gpnmb値が高値であることを明らかにした。英国のオンライン科学雑誌「Scientific Reports」に掲載。（11月・臨時発表）

津島祭



津島地区で11月6～7日、津島祭を開催しました。テーマは「笑顔くだ祭☆岡大祭」すべてを忘れて笑いな祭。恒例となった文化系サークルの展示、落研の寄席、ダンスステージ、応援団総部による演舞、ミスコンやお化け屋敷などさまざまな企画が繰り広げられ、模擬店も110店以上が並びました。シンガーソングライター「MACO」のPRコングラサートも行われました。

鹿田祭



鹿田地区では11月6～8日、鹿田祭「鹿田祭ヤ人復活のG(グラウンド)」を実施。医療系キャンパスならではの医学展や国際交流展、学生ボランティアなど多彩な展示を行いました。女装コンテストやカラオケコンテストといった参加型イベント、歌手でタレントのDAIGOさんによるトークショーもあり、多くの観客が詰めかけました。



秋も深まる11月21～22日、津島地区で農学部収穫祭を行いました。会場となった農学部では、研究室有志による模擬店が出店。岡大産のサツマイモ、安納芋の焼き芋や、自家製乳酸菌飲料、花や野菜の販売を行いました。広く一般の方に農学部の研究教育内容をポスターや展示物で紹介する農学部フェアも同時開催。ちびっこサイエンスラボや、ジャージー牛の搾乳体験も行われ、地域の方や多くの家族連れでにぎわいました。

収穫祭

英語ホームページリニューアル

2015年秋、岡山大学英語ホームページがリニューアルオープンしました。

本リニューアルでは、英語サイトのデザインを一新。画像を大きく配置するなど、訴求力を高めました。サイト構造も見直し、訪問される方々が必要な情報に辿り着きやすいようになっています。

今後も積極的に海外への情報発信を行っていきます。是非、ご覧ください！

